Osaka University Knowledge Archive

Title	メタ語用論からの一考察
Author(s)	沖田, 知子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69944
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

メタ語用論からの一考察

沖田知子

１．はじめに

オックスフォード大学出版局辞書部門が「2016 年の語」(the Oxford Dictionaries Word of the Year 2016) に post-truth を選出した。[1] 本稿では、post-truth が取り沙汰される昨今の状況をふまえ、メタ語用論の観点から受け手である私たちが注意すべき点を考えたい。

２．事実と真実

形容詞 post-truth はオックスフォード辞書では (1) のように定義されており、従来の意味 (after the truth was known) に新しい含意 (truth itself has become irrelevant) が加わり、前年度比約 2,000%も使われたと説明されている。インディペンデントの (2) で指摘されるような状況とも相まって[2]、客観的事実や真実より、個人的信条や感情に訴えて世論が形成される post-truth politics の文脈で多く使われたことになる。

(1) Relating to or denoting circumstances in which objective facts are less influential in shaping public opinion than appeals to emotion and personal belief.

(2) The truth has become so devalued that what was once the gold standard of political debate is a worthless currency.

またオックスフォード辞書部門では、新しい含意をもった post-truth が最初に使われたのは、イラン・コントラ事件や湾岸戦争に関する 1992 年の記事だと紹介している。その後には、同じような概念をもつ口語 truthiness (the quality of seeming or being felt to be true, even if not necessarily true)[3] も使われており、truthiness の真実そうに見えたり思われたりするという直感的で個別的な性質を表す事象から、post-truth ではさらに現代の一般的特徴を表す語として飛躍的に使われるようになったとしている。

2016 年といえば、EU 離脱に関するイギリス国民投票やアメリカ大統領選挙をめぐり、情報ときにはフェイク（偽）ニュースが錯綜し、とりわけソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) においてはそれが検証されないままにシェア、拡散される現象が起こった

---

* 本稿は『ことばのインテリジェンス―トリックとレトリック』(2018) 収録の一部を改訂拡充したもので、JSPS 科研基盤研究 (C)「情報デザインのことば学」(JP15K02598) の研究成果である。定年退職後の研究継続に惜しみなく協力をしてくださった言語文化専攻の皆様にこの場を借りてお礼を申しあげる。

[1] https://www.oxforddictionaries.com/press/news/2016/12/11/WOTY-16

[2] http://www.independent.co.uk/voices/us-election-2016-donald-trump-hillary-clinton-who-wins-post-truth-world-no-going-back-a7404826.html (by Matthew Norman)

[3] https://en.oxforddictionaries. com/word-of-the-year/word-of-the-year-2016

年である。フェイクニュースが実際に政治などに影響を及ぼした事例として、讀賣新聞（2017 年 7 月 22 日）は、2016 年の大統領選におけるトランプ氏とクリントン氏に関係するフェイクニュース、2017 年の仏大統領選でのマクロン氏に関するフェイクニュース、パキスタン国防相がフェイクニュースを信じてイスラエルへの核報復を示唆した例などをあげている。この種のフェイクニュースの拡散で、米大統領選での有権者の投票に影響を及ぼしたことは否めず、実際にフェイクニュースに踊らされた狙撃事件さえ起こったのである。

続けて記事では、米大統領選を揺るがしたフェイクニュースの一部は、実はマケドニアの大学生や教諭ら一般市民によって量産されていた、と報じている。このフェイクニュースを量産していた大学生は「普通のニュースを誇張する半偽（half fake）ニュースが手っ取り早く稼げる。米国民が読みたがるニュースを先回りして提供している」と、いわば通常のゴシップ記事とやっていることは同じだと言い放っている。これは、情報の送り手が必ずしも善意もしくは中立的であるとは限らない、という新たな局面を露呈している。

2017 年 1 月には、当時のスパイサー報道官がトランプ大統領就任式の観衆数を「史上最高」と発言し、オバマ大統領就任式の写真との比較[4] などからも反証、批判された。これを擁護しようとして、コンウェイ大統領上級顧問が使った表現 alternative facts (alt-facts, 代替的事実）がさらに油を注ぐこととなった。[5]

(3) **Conway: Trump White House offered 'alternative facts' on crowd size**

Washington (CNN)—White House press secretary Sean Spicer's false claims about the size of the crowd at President Donald Trump's inauguration were "alternative facts," a top Trump aide said Sunday.

In an interview on NBC's "Meet the Press," host Chuck Todd pressed Trump senior adviser Kellyanne Conway about why the White House on Saturday had sent Spicer to the briefing podium for the first time to claim that "this was the largest audience to ever witness an inauguration, period."

"You're saying it's a falsehood. And they're giving—Sean Spicer, our press secretary—gave alternative facts," she said.

Todd responded: "Alternative facts aren't facts, they are falsehoods."

Conway then tried to pivot to policy points. But later in the interview, Todd pressed Conway again on why the White House sent Spicer out to make false claims about crowd size, asking: "What was the motive to have this ridiculous litigation of crowd size?"

---

[4] https://www.reuters.com/article/us-usa-trump-inauguration-image/crowd-controversy-the-making-of-an-inauguration-day-photo-idUSKBN1572VU

[5] https://www.nbcnews.com/meet-the-press/video/conway-press-secretary-gave-alternative-facts-860142147643, http://edition.cnn.com/2017/01/22/politics/kellyanne-conway-alternative-facts/index.html

NBC テレビ番組のインタビューで、コンウェイはこのスパイサー発言を虚偽ではなく「代替的事実」だと擁護をし、その場で司会者から "Alternative facts aren't facts, they are falsehoods." と反論を受け、論争となった。翌日には異なる視点（different perspective）を提供したという助け舟も出た[6] ものの、すでに SNS で拡散してしまった。

ウォール・ストリート・ジャーナルでは、たてられたハッシュタグ #alternativefacts に投稿された言い換え例のいくつか（drunk を alternative sober と言う、など）をあげたあとに、alternative の意味の変遷を振り返っている。[7] 語源的な意味「ひとつのことを行ったあとに次のことをする」が「選択肢や可能性として置き換え可能なもの」となり、1960 年代のカウンターカルチャー運動での「既存文化に挑戦する型破りなもの」から、やがて接頭辞 alt- が「既存文化に挑戦する非主流派」（challenging the mainstream）として音楽の分野で使われ始めたと紹介している。この用法は音楽以外でも治療法などにも使われているが、alt-right（オルタナ右翼、オルトライト）の例もあげられている。これはまさに大方の予想を覆す原動力となった人々であり、オックスフォード辞書部門「2016 年の語」の候補としても以下のように定義されている。

(4) (in the US) an ideological grouping associated with extreme conservative or reactionary viewpoints, characterized by a rejection of mainstream politics and by the use of online media to disseminate deliberately controversial content

ところで、コンウェイがたとえば alternative truth と言っていたら、これほどの反発はなかったのではないだろうか。異なる視点をとると、互いにとっての主観的真実は違うことになるからである。ここでの真実は、絶対の真理ではなく、ある事実を前に真であると判断する主観的見方によるものであり、異なる見方も許容されうる。しかし、客観的事実の代替的なものとして主観的真実をもち出すのは、異なる視点の導入どころか、詭弁、虚偽にもなりかねない。のちにコンウェイは、アカデミー賞授賞式での発表ミスと同じ言い間違いであったとして[8]、"additional facts and alternative information" のことで "Two plus two is four.　Three plus one is four.　Partly cloudy, partly sunny.　Glass half full, glass half empty." のようなものだと抗弁した。[9] たとえ「代替的事実」が「付加的事実と代替的情報」を合成したもの（conflated）だとしても「付加的情報」ではなく「代替的事実」としたところや、例示した言い換えが異なる見方を示したものであっても問題となった「代替的事実」としての扱いは、いずれも詭弁と批判されても仕方ないものであろう。

---

[6] https://www.mediaite.com/tv/hannity-asks-kellyanne-conway-if-wh-relationship-with-press-will-change-dramatically/

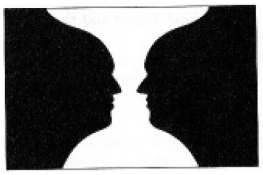
[7] https://www.wsj.com/articles/a-clash-of-alternative-and-facts-1485454691/, http://jp.wsj.com/articles/SB11177354273695693774104582583860579310238 (2017 年 12 月 5 日閲覧)

[8] https://www.theguardian.com/us-news/2017/mar/03/kellyanne-conway-alternative-facts-mistake-oscars 第 89 回アカデミー賞授与式で最優秀作品賞を間違え「ラ・ラ・ランド」と発表するミスが起きた。

[9] https://nypost.com/2017/03/18/conway-alternative-fact-critics-are-f-ing-miserable-people/

３．真実と信実

コンウェイの例示 “Glass half full, glass half empty.” は多義図形を想起させる。多義図形では、形が際立って見えるほうを図（Figure)、そうでない後景となるものは地（Ground）とすると、図と地が反転すると違って見える。見る人が対象をどのように認識、解釈するかにより見え方は異なり、しかも同時に 2 つの見方をすることはできない。たとえば右図は、考案したルビンの名をとって「ルビンの壺（vase)」「ルビンの杯（盃）(goblet)」「ルビンの顔」などと呼ばれるが、白のほうを図と認識した人でも、それを何と言うかについては意見が分かれるのも示唆的である。しかしながら、トランプ大統領就任式観客数を史上最高とする見方はこれには該当せず、虚偽の誹りは免れえないであろう。



(Jackendoff 1983)

このルビンの壺をひくまでもなく、客観的事実を前にして実際には人により異なって見える主観的真実があり、結果的に解釈も異なる。言語学的にいえば多元焦点化（ジュネット 1985）による語りの違いである。また動詞の意味特性では、know は叙実動詞（factive verb）であるが、believe は非叙実動詞でその補文が真であることを前提とはしない (Kiparsky and Kiparsky 1971)。いくら信じても、それが真であるとは必ずしも前提とされないのである。客観的「事実」を知っていても、真であると判断する主観的「真実」があり、さらにそれを信じてしまう、いわば「信実」がある。ここには、truthfulness（まこと）ではなく truthiness（まことしやかさ）ですませる価値転換が含まれている。post-truth は、客観的事実の事実性や主観的真実の真理性の判断まで脅かすまことしやかさ、必ずしも真実でなくても真実らしく見えさえすればよい、という直感的反応への転換を象徴していることになる。

したがって、従来の主観的真偽判断さえ顧みなくなる post-truth の状況では、まことしやかさで事足りるような危うい状況を招くようになった。このようなよく考えないままでの直感的反応は、ネット社会では情報の拡散を招きやすくなる。ある人が真だと信じる主観的真実は、必ずしも客観的事実であるとは限らない。知識たりうるのは現にある事実だけであり、真実はその人の認識の表れにすぎないこととなる。たとえば「会ったことはない」と断言せずに「会ったことはないと認識している」と言うのは、主観的認識のレベルに逃げていると裏読みも可能となる。会ったという客観的事実の否定ではなく、自分にとっては真と思われる主観的真実を言っただけ、と単に事実誤認をしたと後付けの訂正もできることになる。つまり、なんとでも言い換えられるナンセンスな “alternative facts” になりかねないのである。

なお異なる見方を引き出す要因のひとつとして、日本経済新聞（2017 年 7 月 25 日）は、報道各社の 7 月の内閣支持率の世論調査結果を例に「『聞き方』で差異」が出ると指摘をしている。

(5)　日経の世論調査では内閣を支持するかを質問する際、支持・不支持を答えなかった人に「お気持ちに近いのはどちらですか」と重ね聞きしているのが特徴だ。1 度目に迷って答えなくても 2 度目に支持・不支持を答えた人数を結果に反映させるため、支持率と不支持率が共に高めに算出される傾向がある。

重ね聞きをしていないことを公表している朝日の調査と比べると日経は支持率も朝日より 6ポイント高いが、不支持率も 52%と朝日より 5ポイント高い。重ね聞きをするため、日経の調査は「分からない」などと態度を表明しない割合が低くなる。（中略）

選択肢も調査結果に影響する。日経は「支持する」「支持しない」の 2 択で聞くが、毎日は「関心がない」という第三の選択肢を用意して聞いている。政治に対する世論の関心の高さそのものを測るのが目的とされるが、その分、支持率の数値にも影響が出てくる。

さらに調査方法が、固定電話だけか、携帯電話も含めるか、あるいは面接かでも違ってくるとしている。各社の調査は公正に行われているにしても、どういう情報をフィルターしたいのか、その目的と方法いかんによっては違う結果となってしまうのである。これは、情報がどのように形成されていくのかを端的に物語っているといえよう。たとえ悪意などはなくとも、情報はその伝え手のフィルターを経ているために客観的事実たりえないこともあるのも忘れてはならない。

讀賣新聞（2017 年 7 月 26 日）は「都合のいい情報が『真実』」という見出しをつけ、アメリカのメディア事情を紹介している。この鍵括弧のついた「真実」の扱いからも、今一度真実とは何かを考える必要があるといえよう。ここでいう「真実」はむしろその人が真だと信じる、あるいは信じたい「信実」とみなすと、truthiness との接点も見えてくる。客観的「事実」が、真であると判断する主観的「真実」に、さらにはそれを（真かどうかをよそに）信じてしまう「信実」へと変質しているのではないだろうか。know から believe への認識的飛躍とともに、その際の信実がまことではなく、むしろまことしやかさにまで移行することには注目すべきであろう。post-truth は、客観的事実の事実性や主観的真実の真理性の判断まで脅かすまことしやかさへ、つまり真実かどうかではなく真実らしく見えさえすればよい、という感覚的反応への変質をはらんでいることになる。そうなると、post-truth の日本語訳に「事実軽視」「ポスト事実」「ポスト真実」「脱真実」などの揺れがみられるのも示唆的である。

このように、絶対的事実ではない相対的真実さえもが信実となりかねない、解釈の次元へと突入する。解釈する者のフィルターが大きな影響をもち、話題によっては「鰯の頭も信心から」のような無批判的態度さえうみだしかねない。その結果、従来の主観的真偽判断さえ顧みられなくなる「脱真実」、まことしやかさで事足りるような危うい状況を招くようになったのである。そしてそれを助長しているのが、近年飛躍的に発達してきたネット、さらには SNS である。新たな局面としてのネットの特殊性にも注意が必要となる。

４．ネットの時代

「池上彰の大岡山通信―若者たちへ―137」（日本経済新聞 2017 年 6 月 26 日）は、post-truth「脱・真実」が「情報が事実かどうかよりも、情報の受け手の感情や信念を動かす情報の方が、世論を形づくるうえで重要な役割を持っている時代」への変化を象徴するとしている。さらに「情報の真偽や中身を確かめる前に、印象やムードに乗り、『見て、信じる』習慣が根付いてしまったのではないかと危惧し」、少なくとも「ネット社会には、大量の情報を無条件に受け入れるリスクがあることも知っておく必要がある」と、情報の見極めの大事さを説いている。

2016 年日本では、医療系キュレーションサイト問題に端を発し、多くのサイトが閉鎖される事態を招いた。これは、信頼性は低くても面白い情報の配信という点で、伝えられる内容のみならず、無断引用などの伝える構図も問題視されたものである。この背景には「広告至上主義」や「検索サイトの上位表示テクニック」があり、「著作権の意識が低い」「メディアとしての自覚も足りない」をはじめとする従来では考えられなかったような伝え方の問題が関係しているとされる。[10] 不純な動機から内容と構図の両面で検証もないまま情報が拡散して、社会的影響が大きくなる事態となった。これは送り手側の問題とともに、状況に応じて基準を変える人間の性向に鑑み、見たいものや信じたいものだけを選んだり、検証もしないまま簡便に受け入れたり、さらにはそれを再生産したりする受け手の問題として、情報の真偽を見抜くポイントが指摘されるようになった。一例として、以下のような点があげられている。[11]

(6) ①「何を書いているか」と同様に「何を書いていないか」に着目すべき。
② ウソではないが本当でもない記事がある。
③ メディアは「わからない」と言いたがらない。
④ 匿名発信者はモラルが下がる環境にいる。
⑤ 引用の正確さで、発信者が事実の正確さにどの程度注意を払っているかがわかる。

情報内容の基本は 4W1H といわれるが、それをどのように伝え手が発信するかという伝え方への意識も必要となる。① ② はファクトチェック、③ ④ は伝え手の態度への留意が必要となるが、⑤ は端的に引用という伝え方をチェックすることで伝え手の態度の指標となりうる点で注目に値する。① の「何を書いていないか」の検証は難しいうえ、語り逸らし（the disnarrated; Prince 1988）や語りずらしといった手法もある。当然与えられるべき情報を語らずに済ます語り落とし、実際には起こらなかったことを否定や仮定の形にして述べる語り逸らしや、語るに語れないことをずらして語ったように見せかける語りずらし

[10] http://www.yomiuri.co.jp/science/goshinjyutsu/20161212-OYT8T50096.html
[11] https://www.dailyshincho.jp/article/2017/07200615/? all=1

では、伝え方における裁量や思惑が含まれている。また ② では事実が少しでも紛れ込んでいると、それだけで信じさせられることもある。これらは、③ を回避するためのまことしやかなレトリックともなりうる。それに比べ、⑤ の引用の正確さは原発話と比較する労をとれば検証も可能となる。④ は匿名性のあるネットゆえの特徴であり、上述のマケドニアの大学生のように金儲けの手段として半偽情報がやり取りされていることにもみられる。したがって受け手には、まことしやかな情報も含まれることも念頭に鵜呑みはせず、伝え手の重層的なことば遣いの見極めが求められることになる。

現在はネットの普及で誰もがニュースを作ったり、共有したり拡散したりできるようになってきている。とりわけ ② のようなあいまいな場合、真がほんの少しだけでも含まれていれば、たとえばテーマに関連性があったり、知っている名前があったりするだけでも、自分に都合のよいものや信じたいものに焦点を当て、まことしやかに「見て、信じる」ことすらできる。たとえ Grice (1975) の質・量・様態の公理に違反しても、コミュニケーションの根本である関連性 (relevance) があれば、ひいては自分の興味や信念に合いさえすれば、簡便に情報がそのまま知識としてまかり通ることにもなりかねない。自分に都合のいいものだけを真実とみなしてしまう、いわば認知バイアスが作用するのである。ここにも関連性が果たす役割の重さが浮かびあがる。

讀賣新聞（2017 年 7 月 26 日）は、「FB などの利用者は、自分の信念や主張に合致していれば、出所不明の情報でもそれが真実だと受け入れる傾向がある。それがフェイクニュースに付け入る隙を与えている」というアメリカ有識者の指摘を載せている。さらに、日本経済新聞（8 月 15 日「経済教室―偽ニュースを考える㊥」小林哲郎）では、「『情報の真偽を見極めよ』と促すこと自体が既存メディアに対する信頼を低下させ、ネット上にあふれる『報道されない真実』への接触を促してしまう危険性」を指摘している。さらに「誤情報を信じている人々に反証を提示しても効果がないどころか、しばしば誤った信念を強化してしまう」ような、いわば感情的な反応の連鎖や、再生産によるさらなる認知バイアスを招く悪循環の危険性を以下のように述べている。

(7) 信念や意見が否定されることは自分に対する脅威をもたらすため、怒りなどの感情的な反応が自動的に生じる。これが引き金となって、自分の中で反論を生成して元の信念を守ろうとする。こうして自分の意見と一致する情報は無批判に受け入れ、一致しない情報には無理にでも反論しようとする。

さらに、ファクトチェックによって誤情報が繰り返し報道されることで、その誤情報があたかも真実であるように勘違いしてしまう副作用もある。よく知っている情報であるほど認知的処理が容易になり、それを情報の信ぴょう性の高さであると誤解してしまうバイアス（ゆがみ）が存在するためである。

信条などを同じくするグループ内では、必ずしも事実ではない情報が多くの者にとって

同じ真実となって拡散しかねない。これは見方を変えれば、「見たい情報を選択的にみる『フィルターバブル』と称される現象が起きて」(日本経済新聞 2017 年 8 月 16 日「経済教室—偽ニュースを考える㊦」関谷直也)、他の情報から遮断される状況を無自覚にも招いてしまうことでもある。したがって情報をどう見極めていくのかは、受け手にとって非常に大事になってくる。脱事実の真実、脱真実の信実から脱さない限り、客観的事実とは無関係に信実が独り歩きして代替的事実とうそぶく事態ともなりかねない。ここでファクトチェックの必要性が指摘されるのは、やはり客観的事実そのもの〜の回帰であろう。

５．メタ語用論的意識

SNS の発達とともに情報がその中身とは関係なく大量に消費され、その流れのなかでさらに拡散していくという状況が生まれた。そのため、情報をメタ的にときには批判的にみて、使い手や送り手の心を確かめようとする、受け手の主体的解釈は欠かせない。自らの無知や認知バイアスにも留意しつつ、客観的事実と主観的真実を見極めなければならない。実際にはどういうことなのかとことばの裏も読み、織り込まれたり盛り込まれたりした仕掛けや嘘を見分け、ときには差っ引かれたり読み込まれたりする情報の修整（elaboration)、さらには送り手の態度にも留意することも必要となってくる。

ここで、発話の二層構造（Lyons 1977）と関連づけてみると示唆的である。事実が命題部、真実が使い手の命題態度、信実が発話態度にまで関連するというレベルの違いでみていくと、まことからまことしやかさへと逸脱していくさまがわかる。さらに、各レベルにおいてもことばの選択やモダリティの使用などによる使い手の情報の修整が行われていることを考えると、容易に異質なものまでが含まれていくことになり、そのレベルを踏まえた立体読みが求められる。重層構造をもつ情報の立体読みでは、さらに「会話の流れの中にあってしかも直接コトバにはあらわれていない表情・動作等を行間から読みとる」ことや「対象言語とメタ言語が混在する場面でコトバの重層構造に注意しつつ文意を正確に読み取る」ことも求められるのである（毛利 1992)。表情・動作等も内なる心の発露であると考えると、表象とメタ表象にも重層構造があることになる。

事実に使い手の命題態度を付加したものが発話されると、使い手が偏りや虚実をないまぜにする危険性をはらんでいることがあったとしても、受け手は自分の興味があるものであればまことしやかに信じて受け取ることもできる。また、受け手が簡便に見たいものや信じたいものにだけにアクセスしていると、自らのフィルターによるバイアスが加速しかねない。同時に、よく考えずにまことしやかに信じ込んでしまう感覚的反応が、世論を左右する危険性をはらむという受け手の問題となる。脱真実の含意のとおり、事実どころか真偽判断さえも置き去りにされ、たとえば例外的事象いわゆる Black Swan のもつ衝撃性(Taleb 1971）に反応した拡散に拍車がかかり、SNS での影響は測り知れなくなる。改めて受け手の問題としてのリテラシー、ことばに隠された心や仕掛けを総合的にときには批判的に立体読みしていくメタ語用論的意識が求められる。

では、どのように情報を見極めればいいのであろうか。まず、情報の出所の確認のほか、情報には内容と伝え方の両面で重層構造があるので、立体読みをする必要がある。内容的には、送り手は必ずしも客観的事実を伝えるだけでなく、自分の主観などを盛り込んだり読み込んだりして修整することがある。この発話の三層構造を踏まえて受け手は、送り手のことば遣いからメタ語用論的意識をとらえ、そのメタ表象まで察知することが求められる。Culpeper and Haugh (2014) は、メタ語用論的意識の明示的指標として 4 種―語用論的標識、伝達法、メタ語用論的表明、社会言説―をあげている。ことばや伝え方における裁量のみならず、その背景となる言説や思惑も対象としているのは興味深い。送り手のことば遣いに込められたメタ語用論的意識を探索・察知するインテリジェンスとして、さまざまな情報に隠された重要な情報やときには思惑や嘘を見抜き、近似値の解を予測する謎解きの技を磨くことは欠かせない。読み取る際には、受け手自身の無知、認知バイアスや感情的反応なども自覚する必要がある。「都合の悪い事実」から目を逸らして「都合のよい真実」を追い求めていては、見極めることもできない。つまり、送り手と受け手双方にフィルターがあるので、メタ的に読み解く語用論的意識が求められる。

伝え方においては、原話者、発話者や伝達者、ときには作者それぞれが役割を果たすので、情報の重層構造にも留意が必要である。たとえば引用の仕方において、ある情報の一部分だけに光が当てられ、光を当てない部分は語りずらし、語り逸らし、さらには語り落としをすることもある。伝えられない情報にアクセスすることはきわめてむずかしいので、これは伝えられていない情報である、と逆に受け手の無知につけこんだ情報操作にもはまりかねない。ネットの発達により、ときには金儲けなどの手段として悪意ある情報発信すらある。情報の内容と送り手の態度を区別したうえで、情報を選択、整理していくことが求められる。また情報は、送り手自ら発する場合のみならず、原話者の情報を伝える場合もあり、情報には引用をはじめとするさまざまな重層構造が含まれている。そこで必要なのが、メタ的に捉え直して読み解く視点、つまり受け手のインテリジェンスである。

これは実は、私たちが日常的に行っているコミュニケーションの基本でもある。簡便にすますことも多いが、たとえば辞書で語の意味を調べるときのことを考えてみよう。辞書の最初の項にある意味だけでなくすべてを見たうえで、使われている文脈にふさわしいものを考えて選んだりする。ときには文字どおりには使われていない場合もあるので、そこに隠された意図や真意を探ろうとしたりする。さらに発話の流れのなかでどのように使われ、切り盛りされたり、あるいは使い手の心が盛り込まれたりしているのか、整理してみようとする。労なくわかることもあるが、ことばがどのように使われているのか、使い手の心を探って見なそうとするプロセスでは、よく考えてみないとよくわからないこともある。文脈に応じて、ことばとことば遣いを意識した解釈を私たちは随時行っているのである。つまり少し立ち止まって観察、吟味する姿勢であり、ことばの原点に立ち戻ることでもある。

６．おわりに

簡便にあるいは都合よく解を求めすぎると、思いがけないレトリックのトリックやヒューリスティックス（heuristics）の落とし穴に入り込む危険性が待ち受けている。ヒューリスティックスは、「常に正解に至るわけではないが、多くの場合、楽に速く正解を見つけられる『うまいやり方』をさし、『発見法』などと訳される」一方で「とんでもない答えを導いてしまう」こともある（市川 1997)。これは、関連性の解釈発見法にも通じ、解釈の労力と効果は最適のバランスのうえに成り立っており、解は一つとは限らず、実際には考えを巡らせることにより得られる効果が大きいこともある。

以上のように、ことばの表しうる幅とことば遣いから引き出しうる幅という表象とメタ表象の重層構造を意識しつつ、使い手の心を絞り込んでいく謎解きのことば学のプロセスは欠かせない。情報は必ずしもそのまま知識たりえないこともあり、メタ的に捉え直して読み解くことばのインテリジェンスがますます求められる解釈学的転回期を迎えているといえよう。そしてこれはとりも直さず、ことばのおもしろさに踏み込んでいくことになる。

参考文献

Culpeper, J. and M. Haugh (2014), *Pragmatics and the English Language*, Palgrave Macmillan, Basingstoke, Hampshire.

ジュネット G., 花輪光・和泉涼一（訳）(1985),『物語のディスクール—方法論の試み』, 水声社.

Grice, H. P. (1975), "Logic and Conversation," reprinted in *Syntax and Semantics 3: Speech Act*, ed. by P. Cole and J. L. Morgan, 41-58, Academic Press, New York.

市川伸一（1997),『考えることの科学—推論の認知心理学への招待』, 中央公論社.

Jackendoff, R. (1983), *Semantics and Cognition*, Cambridge, The MIT Press, MA.

河上誓作（編著）(1996),『認知言語学の基礎』, 研究社.

Kiparsky, P. and Kiparsky, C. (1971), "Fact," reprinted in *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, ed. by D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits, 345-369, Cambridge University Press, Cambridge.

Lyons, J. (1977), *Semantics 2*, Cambridge University Press, Cambridge.

毛利可信（1992),「立体読みのすすめ」『啓林』4 月号, 7-10; 5 月号, 7-10; 6 月号, 7-10.

沖田知子・堀田知子・稲木昭子（2018), 『ことばのインテリジェンス—トリックとレトリック』（開拓社叢書 30）, 開拓社.

Prince, G. (1988), "The Disnarrated," *Style* 22(1), 1-8.

Sperber, D. and D. Wilson (1995), *Relevance: Communication and Cognition*, 2nd ed., Blackwell, Oxford.

Taleb, N. N. (2010), *The Black Swan: The Impact of the Highly Improbable*, revised ed., Penguin Books, London.